地質ニュース526号，6頁，1998年6月
Chishitsu News no.526, p.6, June, 1998

ー巻頭エッセイー

白嶺丸と私の夢

有　田　正　史[1)]

白嶺丸という私の人生を大きく変えた船がある．この船は将来の海洋開発に備えて，海洋情報を整備するために，日本で初めての海洋地質調査専用船として，昭和49年（1974年）に就航した．この当時は，海洋地質の調査は音波探査が主流で，堆積物の研究者を探すのに苦慮したらしい．

私は九州大学の大学院で重鉱物の堆積作用を研究していたが，そろそろ学問家業から足を洗って別の生き方をしようと思っていた時であった．松本先生から「地質調査所が堆積物を調査する人をさがしているので応募するように」との話があり，先生の過大な推薦によって採用され，学者家業を続けることができるようになった．白嶺丸がなかったら，今ごろ何をしているのであろうかと，今でも時々考える．

乗組員は捕鯨船，貨物船，マグロ船などに乗っていた人達で泥採り作業の重要性を理解して貰うのに随分と時間がかかった．今では，白嶺丸の乗組員は世界一流の調査船乗だと思っている．調査船は最高の装備を持つだけでは機能しない．大事なのは調査作業を理解して，それを動かす人の存在である．その意味で，白嶺丸は素晴しい調査船である．この船で日本周辺，太平洋，果ては南極海まで調査している．

調査船を運行するには，当然ながら巨額の予算が必要である．行政官は十年一日の如く同じことを続けるのは疲れるらしい．十数年前，運行費を要求するために新しいプロジェクトの提案を求められた．

現在はCCOP（東・東南アジア沿岸・沿海地球科学計画調査委員会）に勤務している木下泰正君と相談して四プロジェクト案を作り工業技術院に説明しに行った．

提案したプロジェクトはマンガン団塊の精練所を環礁に作るための海洋調査「アトール計画」，200海里経済水域有効利用のための海底調査「EEZ計画」，「東シナ海日中共同調査計画」と「タイガーシー計画」であった．この中で「タイガーシー計画」が喜ばれたが，残念ながらいろいろな事情により実施に至らなかった．「タイガーシー計画」とは東南アジア各国の領海で白嶺丸を使って調査技術の移転を行い，各国毎に海洋調査員を育成して国際協力に貢献することを目的としたものである．この計画の英文名は当時の嶋崎海洋地質部長の知恵を借りたもので，「Training and Investigation for Geosience and Resources in South East Aisea」の頭文字を拾って，虎のいる国での海洋調査を意味させたものである．この計画の提案は各国からも歓迎され今でも，「虎はどうした」との問い合わせがある．それに対して，「虎は未だ目覚めず」としか答えられないのは残念なことである．「タイガーシー計画」を含めて四つの提案は現在でも十分に通用するもので，やらなければならない仕事だと考えている．

地球の大半は海である．人類が地球上で生きていく限り海の情報は不可欠である．白嶺丸は黙々と海底の情報を取り続けてきた．収得された海洋底の情報は後世に引き継がれる国家的知的財産である．けれども，海は広いのであり，未知の空間が今なお残されている．白嶺丸は私同様に老齢になってきたが，やらなければならない仕事は山ほどある．まだまだ引退の時ではないであろう．引退するときには白嶺丸二世が誕生していて欲しいものである．

もし許されるならば，白嶺丸二世に乗って虎のいる国の海に行き，現地の調査マンと一緒に仕事をしてみたい．これが私の白嶺丸にかけた夢である。

1）　地質調査所 統括研究調査官